

光の子

発行／社会福祉法人光の子どもの家
 編集／光の子 編集委員会
 〒349-11 北埼玉郡大利根町砂原277
 TEL／0480-72-3883
 振替 東京3-128022
 印刷 (株)ドモン企画



わたしの みつよさん

ばらぐみ もり べにこ

若いとき眠れないことがあった。それを聞かれて、さる牧師が言下に信仰が足りないからだと言った。嵐のガリラヤ湖上、船の中にぐっすり眠られるイエスのことを思えば、わたしの信仰の足りなかったことは確かである。そのころヒルテの名著「眠られぬ夜のために」を読もうと思っていたが、いままって読まないでいる。

眠りを愛してはならない。そうすれば貧しくなると聖書（箴言一〇・一三）にある。憤眠をむさぼるなどということである。う（この聖書の訳語は少しおかしい。そうしなければ貧しくなるとでもすべきか）馬は二時間、ナポレオンは四時間、間も眠ればよかったと聞くが、眠りも個人差がある。プロ野球の江川投手は、ねすぎてはればたいた目をしているときに巧投するとか。

眠りからさめよ

理事長 福島 勲

それにしても現代医学は眠りを誘う睡眠物質として五つ発見している。それらが作用して睡眠中枢を眠りに誘うという。

眠るべきでないときに眠ったり、眠るべきときに眠れないことは、悲しく苦しいことである。

イエスの弟子たちは眼をさまして祈れと命じられたのにゲッセマネの園でねてしまった。

ぐっすり眠ってしまったて、よかったのは人類の祖のアダムであろうか。眠っているうちに神はあばら骨をとって妻のエバを造って下さった。ねる子は育つというが、ねむりこけて良かった話はあまり聞かない。十人のおとめの話も居眠りして、五人は失敗している。

このたとえ話も最後は、目をさましていなさい、と結んでいる（マタイ二五）

「あなたがたの眠りからさめるべき時が、すでにきている」（ローマ・十三・十一）審きのときを

知っているのだからとある。

夜はふけて日が近づいている。寝たきり、浮腫と好色、争いとねたみを捨てて、居歩くように、つつましく歩くとすすめている。

肉体の睡眠は明日の働きの活力源である。

しかし魂の睡眠は滅びへの魔力である。

眠ることと食うことのみの追求ならば、人間はシェイクスピアの言葉をかりるまでもなく、動物に過ぎない。

バスカルは、イエスは世の終わりにまで苦悩されるであろう。その間われわれは眠ってはならないといっている。

バンドウイルカのように左右の脳半球を交互に眠らせて眠りのない泳ぎをしているものならいざ知らず、われわれは、ものの二日も眠らなければダウンである。

肉体の眠りは別として、魂のねむり、神を神としない存在こそ厳にいましめられるのである。

個人も社会も国も繁栄に酔ってうかれている時ではない。

眠りよりさめるべき時である。

天職への挑戦

施設長 今関 公雄

光の子どもの家の児童養育活動も、今春で三年目を迎えた。親と共に暮らすことのできない複雑な家庭事情をもつ子どもにとって、第二の妻家としての働きの真価が問われる。今年度の歩みは、まさに「石の上にも三年」の正念場でもある。あわせて、私自信にとっても、理論と実践の深化が問われる大切な年度である。

そこで、ここでは養護施設で子どもを養育することの本質的意義の一面について、少し考えておきたい。まず、子どもにとっては親の存在が決定的に大きい。子どもは親を選ぶことができず、親もまた子どもを選ぶことができない。この厳然たる事実には、人間の私的な思いを超えた秘事性が潜んでいる。つまり、この親子である厳肅な事実をそのまま素直に受けとめ、そこから出発することが求められているのである。

一方、血縁関係を基とする運命

的な親子関係の絆の重要性もまた周知の事実である。特に日本人にとって血の繋がり、格別に強いものがある。身内の対極にある赤の他人の言葉が、如実にそれを示しているところである。だから親にすれば、我が子の養育は自分たちの血を分けた分身へのいわば形見分けの活動なのである。殊に母親においては、おなかを痛めた我が子との原体験が、揺るぎのない事実として刻印されているよう。

これらの意味において親の養育活動は、第三者の徒な関与を許さない聖域性をもっているのである。したがって親が我が子を、今ここで養育するという営みは、いわば「天職」ともいえるべき尊厳性をもっているのである。そこには金品や他者では代替できない掛け替えの無さが潜んでいる。

さて、養護施設で子どもを養育する営みの特質は、何であろうか。その基幹要素は、赤の他人の人所

児童を、職業人の保母や指導員が集団生活形態において養育する点に見ることができよう。よって、その養育を支える根本思想は、おそらく「生みの親より育ての親」との考え方におくことになる。

さらにこのことは、最悪の家庭でも最良の施設に勝る、との通俗的な見方の超克をも意味している。

ところで、養護施設の人的、物的諸条件には、かなりの不十分さが残されている。そのため、濃密な養育活動を実現するうえで、多大の困難性を有していることもまた厳然たる事実である。しかし、その児童養育活動の本質的意義においては、「天職への挑戦」ともいえるべき尊厳性を有していることもまた動かしがたい事実である。

したがって、われわれの児童養育実践は、入所児が家庭養育で付与されるであろう養育水準への、絶えざる挑戦という本質的な課題を有している。さらにいえば、血縁を超える新たな普遍的な人間育成への挑戦をも意味している。

エッセイ 或る建築物

中島 睦雄 (美術教師)

私の住んでいる家の近くに、一つの福祉施設ができた。恵まれない子どもたちを収容して、そこで育てようというものである。ところが、これができた事によって、いろいろな論議が巻き起こってしまった。反対運動である。そして、そのついでのように、建築物までもミソクソに攻撃された。たしかにこれは、一風変わった建物ではあった。この姿では馴じみのない鉄筋コンクリート造りの建物が、突然田んぼの中に建てられたからである。窓が小さくて採光が悪いとか、牢獄の様であるとか、いずれにしても酷評であった。T氏は「良くない建物だ」と言った。「恵まれない子どもを育てる建物としては、コンクリートの打ちっぱなしの内壁が多過ぎて、冷たい空間になっている。材質や色彩で、もっと暖かみや家としての懐かしさが要だ。設計者が芸術家であり過ぎて、でき上がった部分につ

いても、イメージが違つと言う事で、何回もやり直しをしたらしい」とも言った。

私は、これが建てられてから一年後に、この建築を細かく見せてもらった。最初の印象は、大衆おもしろい、芸術的な良い建物なのではなからうかという感じであった。建物の施主であるS氏は、ご自分の建物に対する要求が設計家によって、ほぼ完全に満たされたという様に話された。

若い建築家のF氏にこの建物の印象をお聞きしてみた。「結論を言つと、非常に良い建物です」と言われた。「施主と設計者の理想とが良くかみ合った作品だと思えます。多分、両者の間で相当な議論があったと思います。建築雑誌にあの建物がユニークな作品として紹介されていましたが、写真で見るとより実物の方がはるかに良い建物です。昔の米倉を現代風に再現したという設計士の思想も、と

ても良いと思います。」とのことであった。

私は、大東亜戦争末期の頃を思った。戦火を逃れて私たちの村にも、東京から大勢の人たちが疎開して来っていた。先住の人たちは、異文化を持つ都会人に急に馴じめなかった。子どもたちは、それらの人を徹底的にいじめたし、おとなたちも相当に疎外した面もあったと思う。一種のカルチュアショックによる拒絶反応である。しかし、時間が経つてみると、あの時の異文化との接触が、閉鎖的な田舎の生活の中に新しい風を送り込むという結果になっていたのである。

今度出現した田んぼの中の新しい建物も、ちょうどこれと同じなのではなからうかと私は思う。あの建築の出現によって、建築作品としての良し悪しが、建築芸術の本質に向かうかたちで問題になった。このような事は、恐らくこのあたりでは初めての事かも知れない。そして、カルチュアショックによる拒絶反応もすでに行われたのである。そこで、これを超え

える事によって、次々に何か新しいものが生まれて来るのではなからうかと期待したい。その様な考え方をすれば、あの田んぼの中にできた、世界的な建築家のお弟子さんの作品といわれる、酷評の対象になった建築も、この地域にとっては、いずれ大きな意味のある作品として見直される時が、きつとくるのではないかと思うのである。

虹の国から 1

二ねん 真実 光子

先生 あね。

きょう わたしは どうとくのじかに おもったことは 学んくと正くんが けんかを して かなしかったことです

かなしかったことは 学んくと正くんが なががわる くなつてしまったからです けんかが すきな人なんて だれもいません なかがわるい のが すきな人なんて だれも いません けんかは わたしも きらいです

街角からの風の便り

杉の子保育園園長 星野 勤

少々不真面目な書き出しになってしまふがひよんな事から、何回かの便りを送るハメになった。今関氏にはもう十年近くの間、私たちの小さな保育園の運営の応援をしていただいていた。又後で詳しく報告する機会があると思うが、私たちの小さな保育・福祉現場での少々身に余る試みにも理解と支援を送り続けてきていただいていた。この便りを良い機会にこれまでの応援に答え得る報告やかかわりが生み出せると良いと思ってい

るのだが、頂いてきたものの大きさを思うと、果たせるかどうか、心もとない思いの方が先立ってしまふのが正直なところだ。

私たちの保育園は、東京23区のはずれ、世田谷区の隅にある。園児と一緒に歩いて、少し頑張れば、三鷹市や調布市へと抜け出ていける。その分また、木々の緑や畑土の香りが身近なものになっ

ている。季節の移り変わりも目々、皮膚で感じられるが、それも、管理され植え込まれた樹木や畑作物といったものが中心で、私たち（大人の世代）が、比較的容易にイメージできる、自然の△厚み▽や△奥深さ▽のようなものからはおよそ遠く隔たってしまった。例えば小動物の世界ではかろうじて鳥類が（それも市街地に生きられるスズメ・カラスが中心）数種類だし、ネズミ類を中心として家つきのものたちが、それをねらって棲息する青大将といふ名のどこでも見られた日本では大型の蛇を出現させるほどの数ではない。虫たちも、夜行性の蛾の類のみが少数残っているだけだ。水棲のものになると、動・植物・鳥虫全てが壊滅の状況だといってよいほどだ。

やその共同化としての保育の貴重な背景であり、又私たち自身の精神的な土台になっている、共有しうる△自然のイメージ▽が殆ど失われかけているのではないかと、という危機感を語ったのだ。それはこの世田谷の地ほどひどくはないとしても、早晚どこにも起こることだと思っただ。おそろしくこの△自然▽（そのなかで育まれた共通感覚も含めて）の脆弱化の中で、大半の子育ての共通感覚も激動している。話題として登場する児童虐待ほど激しくはなくとも育児への不安やそれにまつわる自信喪失といった現象はたしかに私たちの保育園の周囲をひたしつづける。（これについても又詳しく報告して見たいが）

もちろん、これらをアレコレ並べて何かが生み出せるわけでもない。今私たちがしなければならぬのは、これら踏みつけ壊し続けてきたものの大きさをきちんと見据える事からだろう。自分たちの△病み▽と△痛み▽から再出発するしか方法はない。手がかりはいえ、どんな時にもどんな場でも子どもたちが確かにそして遅く（＝強がりがかりではなく悲鳴のあげっぷりも含めて）生きていくという事にしかないのだ。それを導き手として、その生命力という磁力線の指し示す方向と一緒に私たちおとなたちが健全で、今の子どもたちの文化が病んでいるといった思いあがりなど何の役にも立たない事だけは確かだろう。

施設病との闘い

野崎 毅

私が光の子どもの家に移り来てから早いもので、季節が一巡しようとしています。この一年近くで消化できない様々な問題・課題が、私のなかに山積みになってしまいました。

これは、この仕事に対する私の理解や認識が不足だったことが原因と思われます。形だけ社会福祉学を修め、肩書みたいなものを、いつしか私は過大に意識したに違いありません。

そんな私に、様々な問題や課題の重さが覆い被さってくるまでには、さほど時間は必要なかったのです。その結果、私のこの仕事に対する自信めいたもの、自負のようなのは、強力なダイナマイトでビルディングを壊すように、いとも簡単に木端微塵に崩してしまつたのです。私の中にあつたそれらの自信や自負のようなのは、実は最初から形を成していたものではなく、毎日アルバイトに明け

暮れていた学生時代でしたからホンモノではあり得ません。

光の子どもの家が施設認可を得た次の年に、働く仲間に加えられた私は、設立に至るまでの経過を何一つ知らないままに、自分のけなしの自信や自負めいたものを振り回していたのです。そんなことがどんなにか他の仲間たちの迷惑や反感を招いたのだらうか、誰もそのことを咎めませんが、今になってそのことを考えると、背筋がハゾツとします。

改めて、子どものこと、光の子どもたちの家があるかたについての認識と理解を獲得していかなければならないと自覚し始めています。自分の愚かさや醜さ、弱みや欠点を他人に見せたり、知られたりすることは、誰でもつらいことです。自信や自負めいたものを振り回してたのですから、それは、獄門台に立つようなものです。どうしても、それを認めたくない自分

が更に醜く思えてきます。自分から進んで獄門台に立とうとは誰も思ひはしないでしょう。そのことで、自分と向かい合いもうひとりの自分を問いただし、批判し、そして勇気づけたりする自己カウンセリングの日々が続きました。自分との闘いの連続です。自分のことで精一杯で、余裕をもつて、子どもを思うことなどできるわけがありません。

しかし、こんな私でも、この光の子どもの家がいかんして施設であるよりは、子どもたちの家であり続けようとしているかについては理解できます。

子どもたちを集団として考えることを排除していくこと、子どもが誰よりも家族に会いたいという願いを何とか実現させようとして家族が来て宿泊してまで子どもと生活を一緒にさせていることなど施設性と真向から対決していることです。これは、光の子どもたちの家の永遠の課題です。

「今後、養護施設の設定認可はあまりないだろう。光の子どもの家が、ひょっとすれば日本で最後

に認可されたキリスト教養護施設になるかもしれない。だから、本当の意味で、子どもたちのための子どもの施設にしていこうための取り組みをしたい」と、就任当時の私への菅原先生の言葉を、思います。

要は、養護施設という枠のなかではあるが、どれだけ暮らしの場である家庭における家族のような関係に近づけられるか、ですから毎日がホスピタリズム——施設病との闘いなのです。施設の枠を、限界をどれだけ拡大できるかなのです。会議はこれを基本にしながら行われています。おそらくこの議論は、光の子どもの家が存在する限り続けられ、求められ、永遠のテーマであり続けるでしょう。

今日も又、子どもたちが学校から負わされてくる宿題と同じ様に私の宿題が、気の遠くなる程山積みされています。

今夜も自己カウンセリングが行われるに違いありません。自己批判と自己弁護と。

三年目の保母の報告

石毛 照子

現場から

光の子どもの家の出発が私の保母としてのスタートでした。その頃の「光の子」に「一年生保母の報告」を一年間しました。そして今回も紙面を与えられて三年目の報告をしようとして、「私V」という人間が子どもと毎日かわっていることを見つめ直す時「私V」を感じてしまうのが現実です。

子どもとの関わり方や姿勢が百八十度ズレてしまっている部分の多いことに気付かされるからです。白紙の頃のストレートな状態に戻ってやり直せたら・・・子どもは多くの色を吸収しているし、時間も戻せるわけではありません。現実を直視して状況を把握し、何をすべきかを確実に思索し、かわりをつけていくしかありません。それは不可能に見えますが可能にしなければなりません。これから「私V」は子どもと毎日暮らしていくのですから。

乳児院からやってきて、赤ちゃ

んのように泣いていた鷹ちゃんは私が初めて担当した子どもです。お弁当を入れたランドセルを負った一年生になりました。アトピー性皮膚炎のため、卵を一切摂らない食事療法をこの四月から始めています。学校で、他の子どもたちと異う食事をして、帰ってきてまたみんなと食事は違います。

この頃、妙に気を引く突飛な行動が目につきました。子どもにとって食事はとても大切なものであることを思わせられます。小学校に入っの緊張と不安。これも、特に親子分離と生活場面の大きな変更を繰り返す経験させられた鷹ちゃんにとって大変なものだったでしょう。この二つのことだけでも私の想像を遙かに超えたものでした。しかし、そんな状態のなかでもがいている鷹ちゃんに関わるには、それを想像できなければなりません。目先のことだけではなく、五年先、十年先

を見通して、今の子どもを考

えるように言われましたが、私は今を想像すら出来なかったのです。それは赤の他人と変わりません。悲しみ、苦しみ、嬉しさを共有しないで、特に子どもとは関われないし、関わってはいけないのです。△痛みVを共有できないことにはここで生活しなければならぬ子どもに関われません。そのことは人としての基本的な感性や思いがなければ、子どもの人格の成長を促す訳にはいかないからです。

△愛するVという思いは自然なものだと思います。ここでの仕事は、先ず△愛するVことなのでしよう。しかし、△愛するVことは仕事だろうか。いや、△愛するVことは、仕事であるとかないとかいうものではなく、関わりのかに自然に生じて存在するものだろう。などと、いつか会議で話合ったことがあります。子どもたちと愛らしくよい子に育って欲しいと願います。これも△愛するVことなのでしょうか。私が△あの人Vを愛しているという錯覚することがありますが、これとは違った

もののようです。

好き嫌いや錯覚ではなく、確実に愛していかなければならない子どもたちがいます。これを私の仕事として、確実に、一人ひとりの子どもを愛していこうと思っています。

私の担当している五人の子どもたちは、五年先、十年先にはどんな人になっていくでしょう。十年先を考えるから、今を確実に育てていかなければならないのだろ

うと思います。少々太り気味の長男としての逸郎君は七ヶ月前に腕白だが優しい弟と一緒にやってきました。大分烈しい家庭の状況に痛みつけられながらも、とても優しい心を蓄えて。だから、友だちと遊び、人を△愛するVことを識って欲しい。權也君（以前は丁君と報告していた）と珠弥ちゃん。昨年八月に妹の珠弥ちゃんが乳児院からやってきて、兄妹が一直線につながりました。支え合って育って欲しい。まだ何も見えないしできない。三年目です。言い訳できなくなりなりました。

養護メモ 11

お祭り

菅原 哲男

養護施設光のこどもの家は、設立の基礎を日本国憲法によっており、児童憲章の精神を理念とし、その運営は児童福祉法の規定を受けているものである。

今年には児童福祉法制定四十周年を記念しての児童福祉週間を迎えた。

どんなに周到に用意され、叶う限りに理想的なものであったとしても子どもたちにとって施設に入所しなければならぬことは、望ましくも誇らしいものでもあり得ない。親や家族と一緒に居ることもできない貧しさ、この国が豊であればあるほど痛烈の度を増大させて子どもたちやそれに関わる者たちを圧し潰しているのである。

そして、養護施設のなかで展開されていく子どもたちの毎日の生活はどのような人所に至る理由によって多くの規定を受け続けていることもまた隠れようもない事実である。先日、小学校のPTA総会の来賓の挨拶で、町の有力者が「光の子ども

の施設反対運動は、町の子どものを守るためにしたもので、町を愛する、やむを得ないものであった。しかし、幸いなことに光の子どもの家の子どもたちはみんな良い子だった」と語ってひととき多い拍手をうけた。これがこの町の多くの人々の実感であり、光の子どもの家の子どもたちが置かれているこの町の位置であるだろう。

施設の子どもたちが受けているあらゆる側面での規定——決して彼らにその責めも因もないのだが——は枚挙に暇がない。施設存在は必要悪である。無い方がいい。私も何度もこう言い続けてきた。光の子どもの家の設立を志し、多くの人々に支えられ何とか実現し、そしてその運営も支えられ続けている今も、彼らの人権を守る上で、彼らがここで生活していることを社会的に秘匿してやり、ライ

フヒストリーを覗き見られることから守らなければならないことも多いのである。

子どもたちがここで展開する日常生活のあらゆる場面の、入所理由による呪縛からの解放こそ為されなければならぬ責務だろう。

昔、お百姓は、自分たちが作る穀物の殆どを年貢に取られていたことに象徴されるように、日常のあらゆる場面で抑圧されてきた。

このような日常性を突破する手だての一つとして祭があった。その日はかりは、あらゆる規制から解放され、日頃ゆるめられない整然として、底抜けに楽しんだ。そのような非日常的な突出が、盛大に華々しく、豊になるにつれて、農民あるいは町民としての結びつきや誇りのようなものになり、それぞれの文化へ発展してきたものだろう。

それまで人としての数に入れられず、女子供として扱われてきた歴史に終止符を打ち、子どもが、人として尊ばれ、社会の一員として重んぜられ、よい環境のなかで育てられることを、高らかに宣言

された児童憲章の制定を記念する子どもの日を、どう過ごしてきたのだろうか考える時がきていると思われる。

今年の児童福祉週間を記念する行事を考える委員会は、ピクニック、映画会を楽しもうという企画から、子どもの日を日常生を超越する△祭りVに辿り着くまで二週間検討を重ね、悩み抜いた。

望ましくも誇らしくもない入所理由を持つ子どもたちが、祭りで自らの姿を地域の目に曝すことを避けるべきだとの意見は重い。

その重い日常は入所理由に規定され、突破されなければ・・・。予定の一週間前、委員長の丹羽倫己は決意を迫られた。

△祭りVのための遅すぎた準備はこうして始められ、当日を迎える三日前は丹羽・野崎・坂巻らは殆ど徹夜で頑張り、皆を巻込んだ。

薄曇りの子どもの日、子どもたちは、嬉々として友だちを招き、映画に興じ、バーベキューを作って接待をし、歌い、踊り、演じて賑わい、そして△かがやいたV。

日

誌

抄

ス

ペ

シ

ヤ

ル

光の子どもの家の歩みも三年目を迎えました。これまでに、地元の人々には大変ご迷惑をおかけして参りました。あの反対運動のうねりのなかで、大和根町の人たちは、悪役としてマスコミにたたかれ、その一方で、子どもたちが次第に増えてきて、幼稚園・学校・子ども会など様々な場面でお世話をおかけしています。そんななかで、開設以前から私たちを陰に陽にお支え下さった人々もたくさんおられます。

日誌抄スペシャルでは、そんな人々を折にふれてご紹介します。

羽鳥唱平氏は光の子どもの家の地区の区長さんでした。法人設立の計画段階から、当時の町長さん共々熱心に、地元の人たちを回り説明してくださいました。建物ができ上るうとしていた頃に、突然起こった反対運動の昂まりの中で、地元の人たちから非難の目で見られても、全く姿勢を変えず、「俺たちは間違っていない。戦後間もない、皆が貧しかった頃、台風によって利根川が決壊し、ここら一帯水浸しになった時、全国から暖かい援助を頂いて助けられた。今、俺たちはその時の恩がえし

のできる時だ。」と言い続け、野

海水浴に招かれて、旅費に困り実現不能となっていた時、自分の会社のバスを提供し、初めての全体での旅行が実現しました。

開設以来、毎年、彼女が所属している東地区婦人会は役員が挙てご協力下さり、年末には多大なご寄付をお寄せ下さっています。

針ヶ谷広一氏は反対運動の初期にPTA連合が開いた説明会で、その進め方や方向に疑問を持ち、私どもに事情を聞きにきて下さって以来、熱烈なご支援を続けられている。かまびすしい個人攻撃の怪文書まで、一方的な攻撃に曝されていた頃、朝早く訪ねては激励下さり、夜遅く町の有力者を伴って私たちの説明の機会とし、地区の旅行の帰りにバスごと立ち寄っては施設見学と交流と支援の集

会に。又、ここでの初めての子ども誕生会を地区の有志に語り、赤飯を炊き、御馳走を作り持ち寄って盛大にお祝いできました。

まっすぐな行動と性格で私たちにも苦言を直言。職員たちも「陰の理事長」とニックネームして、尊敬し、慕っています。(くら)

隔月発行で三巡りしました。今号の発行は大変遅れてしまいました。年度の切り換え時と言いう言い訳も通用しません。怠惰を悔いてお詫びします。彫刻家で美術を高校で講じられている中島先生の文章を俳句誌「浮野」より転載の快諾を得て掲載しました。この地の様子の一端を雄弁に語っています。☆杉の子保育園の星野先生の子どものとらえ方、考え方とその取り組みを連載でご紹介いただけることは光栄であり楽しみです。子どもたちのよりよい育ちのために成果を共有したいものです。☆四月半ばに第二号の退所がありました。三才の男児で離婚の父母がもう一度やり直す決意の中へ返っていきました。嬉々として。児童相談所とのよい共働の成果です。感謝☆一万円余りが繰り越しと言

反射光

隔月発行で三巡りしました。今号の発行は大変遅れてしまいました。年度の切り換え時と言いう言い訳も通用しません。怠惰を悔いてお詫びします。彫刻家で美術を高校で講じられている中島先生の文章を俳句誌「浮野」より転載の快諾を得て掲載しました。この地の様子の一端を雄弁に語っています。☆杉の子保育園の星野先生の子どものとらえ方、考え方とその取り組みを連載でご紹介いただけることは光栄であり楽しみです。子どもたちのよりよい育ちのために成果を共有したいものです。☆四月半ばに第二号の退所がありました。三才の男児で離婚の父母がもう一度やり直す決意の中へ返っていきました。嬉々として。児童相談所とのよい共働の成果です。感謝☆一万円余りが繰り越しと言

う際どい決算でしたが、皆さんのご支援などにより、国や県の規定を二名超えて職員を採用し、子どもたちの養育に当たることが出来来ました。心から感謝し、更なるご支援を伏して願います。(哲)